
うちの子

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちの子

【著者名】

N1204P

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

子どもの声、通訳します。

そんな看板を掲げたホームレスがやってきました。

「お前、臭いなー。ママ、早く行け。こんなやつになくていいよ、あっちにけ、シシシシー！」

小春日和の空の下、街中の公園の片隅にホームレスが来た。ボロボロのジーンズに、くすんだ灰色のシャツ。近づくだけで据えた匂いを感じる。明らかに久しく切つていない長髪、そしてひどい髪、できれば近づきたくない。片岡晴美は、嫌悪感を顔で表した。

いや、晴美だけではなく、周りにいたママ友達も不愉快極まりなかつたと思つ。

しかしながら、近づかずにはいられなかつた。このホームレスは近所でも話題のホームレス。引いているリヤカーにはこんな風に大きく書いた看板が掲げられていた。

「子どもの声、通訳します」

さつきの声も、ホームレスが言つた言葉だつた。晴美のママ友の人、沙紀の子どもの声を表したのだろう。沙紀の子はまだ一歳半、「ばあば」「ブウブー」などの言葉がからりうじて出せるか出せないかぐらじである。もちろん、流暢な日本語を話せるわけがない。

その子の声を通訳したといつのである。

「ねえ、うちの子、そんな風に話すのかしら？」

「ママ、いいから。臭くて鼻が曲がりそつだよ。家帰つて、早くアンパンマンのDVD見よつぜ！」

沙紀の問いかにも、子どもの声を通訳した言葉で返していた。

「大河は、もうちょっと口の考え方がしっかりしていると思つんだ
けど」

「何言つてるんだよマヤ、あんたの口のまき方が移つてんじやねーか。俺のせいにすんなよ」

「そうだよ。自分で気づいてないのかもしないけど、パパが仕事に行った後とかひどいじやん。『はあ、やつと寝てくれたよ。毎日毎日ビービー泣きやがつて、離乳食の食べ方は汚いし、すぐうんこはもうすし、臭いし。あー、カラオケ行きてー』とか言ってんじやん。ま、気持ちはわかるから、別にい……」

「団星だからって逆ギレすんなよ、ママ。ちょっとかっこわりーよ」「つるさいうるさーつるさー！もういいわ。胡散臭い、あんたなんてのたれ死んじまえ。行くわよ大河」「だから、早く帰ろうって」

沙紀は、晴美たちの方を振り返つて言った。

「私は気分悪いから先に帰るね。みんなも信じない方がいいわよ」

頭から湯気を出しながら、沙紀は子どもを抱っこして帰つて行つた。
気持ちはわかるけど、独り言でも子どもに聞かせちゃだめだなあ、
と晴美は心の中で思つた。

ホームレスは、そのままそこに立ち尽くしていた。別に何をするわけでもなく、何かを望むわけでもなく、子どもの声を通訳し続けていた。

彼がこの公園に来たのは3日ほど前のことだつただろうが、ふらりとやつてきて、その子どもに会わせた声を出す。ただ、通訳するだけなら胡散臭くて誰も寄つてこなかつただろうが、夫婦のプライベートな話も出てくるから、信憑性が増していた。

「ねえ、お母さん。あんまり、夜遅くに喘がない方がいいよ。うちのアパート壁薄いから、隣の人聞かれちゃうよ」

「ママ、浮氣はやめた方がいい。トドックで来る男の人なんて未来ないしぃ。僕の教育上にもよくないし、パパにバレたら刺されるよ」

「株式投資は危ないよ。素人が手を出すもんじゃない」

母親と子どもの様子からなんとなく話しているのだと思つていたのだが、浮氣や株の話はもちろん本人たちしか知らないことだらう。周りでも、デタラメだと思つて聞いていたら、当の本人は青ざめた顔して子どもの手を引いて帰つていく。そんな光景をこの3日間、晴美は遠巻きに見ていた。

そして、今日、また来たホームレスにママ友達と近づいてみたのだった。

「やっぱり気持ち悪い、やめておけば良かつた…」

と晴美は心の中で毒づく。昨日の貴志との口論をネタにされでは嫌だなあと、心が陰つた。娘の学資保険をどれくらいにするかで、口論になつたのだった。特に貴志はその手の金銭関係にはうとい。完全に晴美にまかせつくりなのにも関わらず、「金額が高い」だの「必要ないんじやないか?」だの文句をネチネチ言つてきた拳句に、「新しい車がほしいなあ」との言葉が出た瞬間、晴美も爆発してしまつたのだった。

朝は完全に、無視して送り出してしまつたのもあり、後ろめたい気

持ちがある。そう考へると、娘と手をつないでいる力も強くなつてしまつた。

「ねえ、やつぱり帰りましょ、う？」

と同じママ友の京子が口に出した。口元が若干ひきつっているので、晴美同様に後ろめたいことがあると想像に難くない。

「そ、そうね。沙紀ちゃんも帰つちゃつたしね」と、もう一人の美穂も続いた。

「じゃあ、今日はこの辺で帰りましょ、うか」

晴美はホッとした気持ちで言った。

ホームレスはじつとしている。しかし、その田が娘を見ていることに気が付いた。

晴美は、背筋がゾツとするのを感じながら、平静を装いながら口に出した。

「じゃ、じゃあ、また今度ね。またメールするね」

「うん、それじゃあね」

「また、ね」

「その子の声は聞こえない」

ホームレスはちよつと驚いたように話した。

「え？」

晴美は思わず聞き返した。

京子と美穂は、チラシとこつちを見たが、足早にさつてしまつ。声をかけるタイミングも失つてしまつた。晴美は足を止めてしまつたことを後悔した。

「その子の声は聞こえないよ」

「ちよ、な、何? 何を言つているの?」

「その子の声は聞こえないんだ」

「何? どうこうしたことなの?」

晴美はちよつと涙ぐみそうになつた。そのまま、帰つてしまつて何事もなかつたようにしてしまえば良かつたのだ。娘を思わず抱き寄せながら、ホームレスの田縁から隠すようにした。

「俺は、いつも子どもの声が聞こえる。いい親ならいい声が聞こえるし、嫌な親ならそれに合わせた嫌な声が聞こえる」

「・・・」

「なぜかはわからない。いつからかもわからない。でも、ある時から、子どもの声が聞こえるようになつたんだ。そして、子ども達はそれを親に伝えたがつていた」

ホームレスは、今まで違つ声や口調で話していく。本来の話し方がこうだつたんだろう、と晴美は思つた。娘のしがみつく力が、少し強くなつたような気がした

「もともと子どもつてこつのは、前世の記憶を多く残したまま生まられてくるんだ。だから、ある程度のことはわかつていい。母親や父親の言うこともわかるし、社会情勢だつて知つていい

「そんなことどうしてわかるのよ?」

「子ども達が言つているんだ。子ども達同士で遊ばせると、ジツと見詰め合つ時があるだろ? あれは、『お互に大変だなあ…』と田で訴えているんだよ。そして、自分の感情もはつきつしているけど、肝心の身体が思つようく動かないんだ」

晴美はしがみついている娘を見た。思い当たる節がないわけではな

い。もともと、おっぱいを吸うところの行為だって、生まれた瞬間から備わっているなんて不思議すぎる。

「そして、子どもの身体が成長していく。しかし、感情や記憶はどんどん退行していくんだ。筋肉と同じ、使っていないと衰えていく。顕著なのは言葉さ」

「じゃあ、赤ちゃんはもともと私たちの言葉がわかっているの?」

「ううう。でも、2週間も言葉を話さないで暮らしてみな。声を出すことなんてできなくなるんだ。そう、ちょうど入院患者が歩けなくなつちまつみたいにな」

晴美は、完全にホームレスの話に聞き入つてしまつていた。娘はじつと晴美の右足にしがみついていた。ちよつと何かを訴えかけるよう。つい。

「ちよつちよつてこねつちよつて、脳も使わなくなつて何もわからなくなつてくる。俺が聞けるのは、まだ脳がちゃんと動いている時の声、だから安心しな。奥さんの心の声は聞こえないんだ」

「でも、この子の声が聞こえないってどうして?」

「おかしいんだよ。その子にくつだ?」

「1歳と1か月くらい……」

「それなら、声はたいてい聞こえるんだ。間違いない。わざの他の子ども達の声も聞こえていたんだ。でも、その子の声は聞こえない」

「そんな、どうして……?」

晴美は不安に思つた。ついで、隣の優斗君より言葉がちょっと遅れているかも…。美月ちゃんはもう走るくらいだつていうのに、娘はつかり立ちしかできない…。言葉が聞こえないってこののが関係

あるのだろうか…嫌なイメージばかりが浮かんできた。娘のしがみつく力は強くなつた。

「娘さんの顔を見せてくれるかな?」
「え、ええ…」

と言つて、晴美は娘を抱つこした。ホームレスと娘の目が合つ。ホームレスはじつと娘を見つめていた。

「なんてこつた。この子、自閉症だ」

「え? 今、なんて?」

「この子は完全な自閉症だよ」

晴美の頭はグワングワん揺れた。自閉症つて、あの自閉症? うちの子が…まさか? そういえば、手づかみ食べもしないし…あんまり田を合わせようともしないし…いや、そんなの…晴美の田には涙が浮かんできた。

「けど、な、今なら何とかなるよ」

「えつ?」

「さつさも話したけど、俺は子どもの声が聞こえるつて言つたよな

「ええ」

晴美はもどかしく、強じ口調で答える。

「自閉症つてのは、もともと脳みそに悪いといふのがあるつて考えるけど、脳みその一部がちゃんと動いてない状態なんだよな」

「そんなことはいこのよ。うちの子は、なんとかなるでしょ? どうやつたらいいの?」

「簡単さ。これから俺とこの子で会話をするんだ」「どうこいつこと?」

晴美は今にも掴み掛らんばかりで問い合わせる。

「いや、だから、今はまだ人見知りをして俺とも会話をしようとしていない状態さ。奥さんにもあるだろ？旦那とケンカして、口もきたくない状態の時が」

晴美は昨日の出来事と、今朝の振る舞いを思い出した。

「そんな時が生まれてからずっと続くつて感じなのさ、自閉症つてのは。だから、これからまだ脳みそが若いうちにそれをなくしてやればいい。俺との会話を楽しませて、脳みその動いてないところを動かしてやればいいのさ」

「そんな…そんなことができるの？」

「できるさ、だって、今までだつてやつてきたもの。だから、俺は」

「うこう力を神様にもらつたと思うんだよな」

ホームレスは満足そうにうなづいた。さつきまで無表情だった顔に笑顔が浮かんでくる。晴美にとって、それは神の微笑だった。

「じゃあ、やつてちょうどいい！今すぐこい！できるんでしょ？」

「できるけどさ、ねえ？」

ホームレスの顔がニヤニヤつくる。

「俺も、ほり、こいつ立場だからね。わかるだろ？」

わざといじじく、ホームレスはOKサインをしてみせた。晴美は我慢ならない様子で続けた。

「お金ならいくらだつてあげるわよ。いくらあげたら、この子を普通にしてくれるのでー」

思わず大声になる。ホームレスは周りを見渡したが、晴美が気にする様子はなかつた。

「そうだなあ。せめてこれくらいは

と言つて、ホームレスは両手を広げた。指の間から、ニタニタした顔のホームレスが見える。晴美には、もうそんな顔は目に入つていなかつた。

「わかったわ。10万円ね」

「100万さ」

「ひや、百万？」

「安いもんさ。この子の一生を左右することだもん。そして、この会話にはいろいろと物も買わなくちゃならないしな。必要なものも多いんだ」

晴美は時計を見た。短信は2時を回つたばかりだった。銀行に行けば、100万くらいすぐに用意できるだらう。

「わかったわ。銀行に行つて、降ろしてくるから。明日払えばいいわよね。だから、今すぐやつてちょうだい！」

「いや、明日は無理だ。明日には違う町に行かなくちゃならない」

ホームレスは、目を細めながら言つた。口元は笑つたままだつた。

晴美は、一瞬躊躇したが、

「わかったわ。今すぐ行つてくるから」

「そうだな。それがいい。俺はここで4時まで待つてゐるから、すぐにあるんだな」

「4時ね」

「ちょっとでも過ぎたら、アウトだぞ」

「わかったわ」

と晴美は詰つが早いか走り出した。娘は寝ていたのか静かにしていたが、いきなり走り出したのが居心地悪いのか泣き出した。

晴美は泣き声を聞きながら走った。

「うしお、この子が自閉症なんて…100万くらいのお金でなるんなら安いものよね…貴志も納得してくれるはず。車なんて安いのでもいいもの。うう、なんとかなるわ。いざとなれば、実家の母さんに泣き付けばいいかもしれないし…

玄関のカギをがちゃがちゃさせて、家に入り、通帳と印鑑を引き出しら出して握りしめる。また、玄関を出るとカギをかけることももどかしく、銀行に走り出した。

早く、早く、なんとかしなきゃ…

抱きかかえていた娘は、いつの間にか泣き止んでいた。見ると、すうすうと寝ていた。晴美は、こんな状況でも眠れる我が子を見て、やはり普通の子とは違つと、よつ焦つた。

銀行に入り、係員に詰め寄る。

「すいません。急用で、今すぐお金降ろしたいんですけど…」

晴美の剣幕に押されたのか、係員はすぐに対応してくれた。手続きを取り、100万円が帶にくるまれて、出てきた。それを掴み、また走り出せうとしたその時、

「びえ――――――！」

わざとまではやすやと寝ていた娘が、火をつけたように泣き出した。今までに見たことがないような泣き方だった。

晴美は驚いて、さすがに走り出すことはできなかつた。

娘は一向に泣き止む様子はない。あやしてもあやしても、かまわず泣き続けた。係員も周囲の客もざわざわしている。

一人きりあやしてもやはり一向に泣き止む様子がない。しかたなく、泣いたまま精美は銀行を出て、走り出しが、

と泣き続いている娘を抱きながら、走ることはなかなかできない。

「あなたのためなのよ。ちよつと我慢して頂戴！泣き止んでよ！」
とあやし続けるが、やはり一向に様子は変わらない。少し、人気の
ない通りに移動してあやし続けた。

ふと、時計を見ると、「3・5」を指していた。

もうかれこれ40分以上泣き続いていることになる。すさまじい勢いで、40分も泣き続けるとはどういうことなのだろうか?と晴美

も途方に暮れて泣き出しちゃった。

「どうして泣き続けるのよ。もう4時になるじゃない…あなたのためになんとかしようとかんばっているのに！」

と、その時、ピタッと娘は泣き止んだ。そして、ニタアと口元を緩めた。目は涙を流し続け、真っ赤に腫らした状態で、微笑んだのだった。

晴美は時計を見た。短信は4を指していた。約束の時間になつてしまつた、と思い晴美は急いで駆け出した。公園までは5分とない。

ぜえぜえいいながら、公園に向かつた。すると、ふと一台のパトカーとすれ違つた。ランプもついている。嫌な予感が晴美によぎつた。

公園に入り、見ると、リヤカーが取り残されていた。ホームレスの姿はない。辺りを探してみるが、やはりいない。

どうじよつ…警察に連れて行かれちゃつたのだ…と晴美は途方に暮れた。晴美は、抱きかかえている娘の顔を見る。先ほどと同じように目を真っ赤に腫らしながら、キヤツキヤツと喜んでいる。こんなに機嫌な娘の様子も久しぶりに見た気がする。

晴美は、砂場の近くにあつたベンチに腰をかけた。全身汗だくで、恥ずかしかつたが、周囲には砂場で遊んでいる小さな女の子が二人いるだけだった。ままごとをしているようである。

すると、娘の口元が動いた。

「ママ、騙されやすいんだから、気を付けて」

娘がしゃべった。ようし、晴美は思った。

「なによ、生意気な口をきて～子どもはお母さんにそんな口を利かないのよ」

「だつて、こんな風にママ言つてたもん。んじゃ、次は私がママの役やるから、祥子ちゃんは娘の役ね。晩御飯できたわよー。今夜はカレーよ」

砂場の一人の女の子は、楽しそうに泥団子を作り出した。

なんてことはない、まま」としていた一人の会話だつた。しかし、晴美にとつてそれが娘の声のよつに聞こえた。

なんだ、私にだつてわかるじゃない。と晴美は思つた。頬に涙が伝う。毎日の中で、じつと娘を見る回数も減つていた。日々の暮らしの中で、誰からも評価されず、それでもやらなければならない仕事、そんな中で自分がすり減つていたことを感じた。

あながちホームレスの言つていたことは間違いではないのかもしれない。晴美たちの会話を聞いて、あの時間、泣き続けたのだから。

娘は相変わらず微笑んでいる。晴美は、腕の中にある命をいとおしく思つた。そして、自閉症でもいいじゃないか、この子はこの子だからそれでも立派に育てて見せよーと強く思つた。だつて、こんなにかわいいのだから。

晴美は、自分も目を真つ赤に腫らしながら、娘を抱きしめ、頬ずりをした。そして、力強い足取りで家への道を歩き出した。少しだけ、見える風景が高くなつたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204p/>

うちの子

2010年11月25日00時23分発行